

吉川英治全集

第37卷

吉川英治全集・37 新・平家物語(五)

著 者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二番二
電話東京九四二局二二二二(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特澱

第一刷発行 昭和四十二年十二月二十日

定価 六百八十円

© 一九六七年 吉川英治

目次

千手の巻（つづき）

三

やしまの巻

一〇五

浮巢の巻

二五

壇ノ浦の巻

三九七

新·平家物語

(五)

千
手
の
巻
(つづき)

新柳 営

鎌倉の柳営も、足かけ四年、ようやくその大規模な土木の工事は、ほぼ完成を見せかけている。

が、なお一部には、問注所や公文所などの、新たな普請にかかっており、石垣の石はだにも、路面の土にも、まだ苔さびた趣きはどこにもない。

殿廊の材は白木のままでし、高欄の金具もびかびかしていて、すべてが、眼に痛いほど真新しかった。覇氣と勃興の象徴ではあったが、深さ、ゆかしさ、風雅な風はないのである。柱、棟木、大屋根の曲線までが、都風をきらって、すべて独得な武家様式の豪壮をあらわしており、すでに「鎌倉建築」の好みをここに兆していた。

巳ノ刻、少し前。

重衡は車を降りて、この新しい建築群を、眼の前にし、つらなる大屋根を宙にながめた。

しかし、重衡の面には、なんの感興もわいていない。ただ、威を誇示してやまぬぎつい武家趣味を押しつけられる気がし

ただけようである。

元来、かれは殿上の人だ。

いわゆる大宮人ではないが、生まれながら平安朝文化の中に育まれてきた純粋な都人にはちがいない。

『……なるほど。これが、聞こえた関東の府か』

口にこそ出さないが、かれの朱唇に冷笑の影がなくなかない。

「成り上がり者の好み」と見たのかもしれない。

梶原景時は、この日、かれのさきに立って、総門をはいり、

中門も通って、

『こなたへ』

と、おごそかに、みちびいていた。

景時の、しゃちこ張った肩や、容態ぶった歩み方など後ろから見てゆくと、あたりの物の真新しさも、ここの建築様式も、

さまで気にはならないのである。かえって、ふさわしくも見えるのだった。

真白な敷砂の上を、かれについて歩むことおよそ百歩、幅十

二尺ほどの階につき当った。

上を見ると。

左右の廻廊に添って、数十名の外侍が居流れている。また

一段高い内側には、頼朝の近衆や内侍の面々が見え、さらに

両そでの席には、大名たちが、所せましと、つめあっていた。

重衡は、梶原の顔を、かえりみて、

『よいのか』

と、ことば短くいった。

そして、階へ足を踏みかけながら、もう一度、念を押すように、

『ここを上がってもよいのだな』

『どうぞ』

梶原もつづいて、かれに添って、階を昇った。

正面に、上段の間があった。

頼朝の座らしいが、御簾が下がっている。

その大床を七、八尺ほど退がった所に、一枚の円座（わら編の敷物）がおいてあり、重衡は「——それへ」と、着座をすすめられた。

神妙に、かれは、すわった。

視線の陣に囲まれたかたちである。大名以下、外侍まで、百人ちかゝ鎌倉直参たちのまん中におかれたのだ。凝視、冷視、憎視、蔑視、一つ一つの眼ざしが、重衡の姿を射た。

重衡は、動じる色もなかった。かれの眼は、人なき御簾へ向いていた。しかし胸には、やがて現われるであろう頼朝の姿でもない、べつな人間の像がふと描かれていた。その人は、都で会った法然であった。かれはなぜか法然を思い出していたのである。法然のいったさまざまなことを思い起こしているうちに、やがて想いは声なき念仏となって、かれの心は人知れず春の陽のようにほかほか温められていた。

——はるか、奥まった方で、かすかに、鈴の音がしたようだった。なんで鳴った鈴か、重衡にはわからない。

出座は、なかなか手間どった。

『はて、ものものしさよ』

と、重衡はすこし、おかしく思った。

伝統のないところに、しいて容儀や威厳をもとうとする武家心理がわかる気がする。

やや退屈を覚えて来たのだろう、列座の面々も、そろそろ身じろぎしたり咳声をもらして、おおかた眸を散らしはじめた。

重衡もしずかな眼で、満座をずっと見渡していた。すると、かれの視線にゆき当った幾つかの顔が、あわてて眼をそらした

り、面をあからめた。

——見た顔よ。

と、重衡は苦笑を覚えた。

はつきりと、重衡の記憶にあったのも道理だった。それらの顔は、かつては、平家に従属していた者どもなのだ。六波羅や西八条の門に駒をつなぎ、重衡が東大寺の大仏殿を取り囲んだ時、部下として加わっていた武者すらこの座にいたのである。

はしくも、重衡は、今を生きるむずかしさと、世転の縮図をここに見た。けれど、そうした人びとも、かれは憎む気にもとがめる気持にもなれなかった。ただかれらの方でみな、いい合わせたようにみずから恥じるかのような色をどぎまぎさせただけだった。

『叱……。御出座になれます』

どこかで、警蹕の音がした。

一瞬、水を打ったようになり、群臣すべて、頭を下げた。

——と、ひとりの法師姿の家臣が、脇座からすべり出て、正面の御簾をすすると捲いた。

頼朝は、錦の縁をとった上置のうえに、大口（はかま）の両ひざを大きくあぐらに組んで、ゆったりとすわっていた。

政子の好みか、かれも近ごろは洒落者めいた装いである。艶うるわしい洗塗りの立烏帽子に、浮文の直垂は藍地に銀が摺つてある。

『……………』

五本骨の扇子を右手に持っていた。容儀は、さながら摂関家の当主のようである。けれど、その大形な容態が、おかしくないほど、かれ自身の人柄にも一種の魅力と厚みがあった。元来が、北条家の政子やら伊豆の女たちをさわがせた美男でもあったが、年とともに、それに品位と重さが加えられてきたもので

あろう。

『……………』

いつまでも、頼朝は黙ったまま、見すましていた。

もちろん、重衡の姿を、である。

重衡もまた、一言も発しない。

それのみか、かれはまだ、頼朝にむかつて、拝^{はい}をしていなかった。頼朝の眸^めは、相手の礼を催促^{せいつ}していたのであろう。——が、重衡は、ただ毅然^{げんぜん}としていた。頼朝の眼に眼を返しているままの姿である。

『景時』

半開きの扇子が、やっと、うごいた。梶原^{かきわら}の顔をさし招いたのである。

『……はっ』

『大儀だったの』

『おそれりまする』

『何よりは、大切な院よりのお預^よけ人。みちみちにても、万

一のお病^{やま}気などあつてはと、案じていたが』

『至極、おすこやかで、景時もまず、ほっと仕りました』

『途上、手鎖^{てさ}や囚衣^{しゆい}などお強い申したが、あれも院の御内旨^{ごうち}によること、頼朝の心ではない。……が、心ならずといえども、

頼朝のしたこと。さだめし、お恨みでありつらん』

——こう梶原へいいながら、頼朝はまた、ちらと、重衡の方

を見た。重衡の方から口をひらけとの誘いであらう。

初めて、重衡は素直に頭を下げてから、にこと笑った。が、

それは頼朝の肚^{はら}を読^よんでの、苦笑であつたかも知からない。

しかし頼朝は、その礼と微笑を見て、ようやく気色を直して、

こう、ことばをかけた。

『いやなに、重衡の殿、これへ参られたからには、以後の院

議、いがあるとも、御一身の末は、頼朝一存にあること、こ
こを敵国などと思^{おも}えされず、お心やすくおられたがよい』

『かたじけない御意』

重衡は、頼朝のなぐさめを、ことば通りに、うけ取ったかのごとく、

『身に恥はあれ、生きてあれば、思わぬ異郷の山河も見、はからざる人のおん情にも会うものかな、と嘆じられます。しかしただ今、御一存と仰せられたことには、不服がある。かく虜囚の恥を忍んで生き長らえておるもの、もともと、重衡が生涯は、終わつたにひとしいもの。一命はすでに天意にあること。院にそむいてまでの御勘酌^{ごかんさく}には及び申さぬ』

と、なんの感情にも左右されない、まろい声で答えた。

『天意。なるほど』

頼朝も、率直にうなずいて、

『まこと、仰せの通りではある。——思えばこの頼朝も、年十三のむかし、囚^こわれて、平家の門へひかれ、池殿の家に預けられた。……あのおり、もし、雪の近江路にて、父義朝と迷^{まよ}ぐれなかつたら、落ちのびた先にて、父とともに非業^{ひがふ}の最期をとうけていたかもしれぬ。いや、頼朝の今日は無かつたにちがいない。あの夜の大雪も、すなわち、天意というものか』

と、めずらしく、過去を詠嘆^{よんたん}した。そして、また、

『人には運命のあることながら、昔日^{しふじつ}の少年のわれに、故入道殿^{ごにゅうだう}が懸^かけられた情はなかなか忘れられぬ。入道殿が肯^{うけ}かれずば、いかに、池ノ尼どののお口添えがあろうと、必定、打ち首になつたであらうに、助けおかれしは、ひとえに入道殿の御恩。——頼朝、今とても、忘れはいたさぬ』

と、いった。

重衡は、そういう頼朝の顔を、まじろぎもせず、見まもつた。ほのかな血のいろが、重衡の面にもうごいたかに見える。胸底に封じられていた感情が、ついあふれたのかも知れなかった。

『はて、思いがけぬことを承りました』

と、やや改まっていい出したことばの端にも、すこし皮肉な語気があった。

『——今日、この場所にて、鎌倉殿のお口から、そのような述べ懐を伺おうとは、重衡も思いもつけぬことでござった。——およそ平家を仇と恨み、平家を覆さんとされし人は、むかしの佐殿、今の鎌倉殿と、たれ知らぬ者はない。その御仁の口から、故入道どのの恩は忘れぬと聞くは、大きなよろこびです。わけても、地下の浄海入道（清盛）こそ、その御一言にて、初めて、成仏なされしならん』

重衡は、はつきりと語尾をむすんだ。そしてなお頼朝の面から凝視を離さなかった。

とはいえ、相手の忘恩を、いま、責めても始まらないと思う。身は、無力の虜囚である。物狂いと笑われるのがおちである。

だが、もし頼朝に、真実、いまの一言に違わぬ情誼があるならば、即座に、西国の合戦をやめることをここで誓わせたかった。それこそが、生き恥を賭けて生き残っている自分の使命の一つよ、とも思った。

——が、逆に、その考え方の甘さをみずから笑いたくなる氣持をどうしようもなかった。「頼朝が、そんな男か。伊豆女がだましたのは、その口巧きではないか」と、べつな觀察が心のどこかで囁るのだった。

突然、かれは、哄笑した。

『はははは。げにもお互いは凡夫と凡夫。話してみねば分からぬものです。そういうお心の鎌倉殿とは、きょうまで、つゆ知らなんだ。……いや、不明不明』

『これはまた……』

頼朝は、受け太刀気味な不快を、苦笑にまぎらして、

『ちと、御遠慮なき仰せではある。しかし面白い。人の移り、世の流転ほど面白いものはない』

しいて、青白む感情を抑えるかのようにしばらく口をとじてしまった。が、やがて、きつと改まって。

『さきほど、あなたもいわれたが、源平両族の、こうなったのも、いわば天意。自然の循環ではあるまいか。さしも入道殿すら、天寿には剋てず、みまかられた。平家御一門に、あの大器を喪われたことこそ、かえすがえす惜しいことであつた。——もし入道殿がなお世におわせば、天下、かかる紊れも見まいものを』

『みだれは、それ一事によるのであらうか』

『禍の因は、御一門の内にあつたものと存ずる。——かりに頼朝が、いかに野望を抱けばとて、もし、平家にして、院の補佐よろしく、六波羅の政道だに正しくば、蛭ヶ島の一野人に、何ができよう。頼朝を立たせたものは、たれでもない、平家そのものであつたとおもう』

『……』

『故入道殿のわがまま、なされ方、乱暴の数かずは、まだしも、あの大量があつてのこと。したが、なんの御苦勞も知らぬ公達ばらが、なお、宇内の領国の半分を私に有ち、悪政だけを、まねるにおいては、頼朝が立たずとも、天下の怒りは当然であらう。——ただ、不幸なことには、木曾冠者めが、逸

早く、都へ攻め入り、收拾もつかぬ乱をよび起こして、院の宸襟を悩まし奉り、平家御一門をも、西海へ追うてしもうたこと。——そのことだけは、源氏にとつても、悔まれる。——が、いまは都の家も世の信望をも失うて、屋島とやらに逼塞し給う方がたに、頼朝、なんでこれ以上の武力を加え申そうや。……時を見てともに矛を収め、源平二氏、力を協わせて、四民和楽のよい世を見たいとする願ひこそ、まこと、頼朝の本心なのでおさる。いかに重衡の殿、おん身にしても、それには、否やもあるまいが』

雄弁である。

のみならず、理論は立っている。自分の旗あげは、決して野望ではないというのだ。野望の乱は、木曾義仲の所業であり、院を悩ませたのも、諸民を苦しめたのも、また平家を西海へ驅逐したのも、それは、義仲の暴と、平家自身が招いた当然な世の怒りであつたというのである。

重衡は、黙って、頭を垂れた。

頼朝に対してではなく、こと、平家の悪政にふれると、世の衆生にたいして、かれは一言もない悔悟に打たれる。そして、頼朝であれ、たれの声であれ、それを自分にむかつて責める声には、あの石つぶてや泥草鞋に身をさらした日のように、つつしんで、その辱と辛さに耐えねばならないと思うのだった。

『いや何、重衡の殿』

頼朝は、急に、居構えをゆるめて、

『お気に障らぬ。ついあなたの遠慮なさにつりこまれ、こなたも無遠慮を申してみたまでのこと。いずれ以後の方策などについて、重衡の殿のお考えもゆるりと伺いたいものだ。……が、昨夜は遅し、きょうはこの固苦しい列座の中、さだめし、お疲れもなお癒えてはおられまい。……景時』

と、ふたたび、梶原をよんで、

『御辺の役目は、きょうをもつて、終わってよい。長途の勤め、大儀であつた』

と、ねぎらつた。

そしてすぐ、その眸を、右側の列座の中へ移して、

『狩野介、これへ』

と、一つの顔を、さしまねいた。

伊豆の狩野の住人、狩野介宗茂が、すぐ立って、簾前へ来て平伏した。

蛭ヶ島時代から、頼朝に心をよせて、早くから盟をむすんでいた直臣中の直臣で、四十がらみの、見るからに豪直らしい武者であつた。

『狩野介』

『は』

『今日よりは、重衡の殿を、そちの館へお迎え申しあげよ』

『え。それがしに』

『ちと、荷は重かろうが、こよなき誉れと思うがよい。——最前も申しごとく、大切なお客入なれど、院の勅慮を察し奉るに、なお、平家へのお憎しみははなはだしく、重衡の卿も、いわば仇の重なるひとり。依然、囚人たるの御勘気は解けておらぬ。その辺、よう心得て、外見はきびしく、内にては、朝夕のことにも、御不自由のないように、お仕え申せ』

そう、いつけ終わると、頼朝は、すぐ奥へはいった。

群臣は、一せいに、礼を送った。で、たれも気づかない程度の気配だったが、脇床の暗がりに、もう一つ美しい御簾が下がっていたのである。その蔭から、みだい所の政子の影が、同時に席を立てていた。

かの女は政治好きで、かの女も政治にくちばしを入れるらし

いといううわさが、近ごろ、鎌倉の巷間ではいわれている。何しろ、創府の世帯も新しかったが、夫妻もまだまだ若かったのだ。

石の庭

諸大名以下の日動しているお表と奥の新御所とは、ほとんど樹木をおかない広い白砂の石庭づくり、"石ノ坪"とよぶ柳営の中庭でへだてられている。

稲妻形の橋廊下が、白砂の湖上かけられており、その廊ノ口から先へは、大名たりとも、ゆるしがなければいれなかった。

奥の新御所とは、つまり頼朝夫妻を中心とする家族の家庭なのである。——ずっと後年代の徳川氏に見られる江戸城の本丸と大奥との関係といったような公私をくめるめた將軍家生活の様式が、そしてその武家制度までが、ここに、雛形を創り始めていたといつてよい。

『宮中の御用や行事は、日ましに増すばかり。おからだにも日おくつろぎの暇もなくなりました。きょうも、おつかれでございましたらうに』

その私室へもどると、政子は、まったく頼朝を私有していた。侍臣や小女房なども近づけず、何かと、妻らしさをしめしてみせる。

つい軒先の、鶴ヶ岡の頂きも見えないほど、低い密雲が鎌倉

の海から陸を垂れこめてい、風もなく簾前に落ちてくる白木蓮の花も、何か晩春のもだえにみえ、妙にはだ蒸すような日であった。

『雨催いか、いやにあついの。諸大名のいきれもあつたろう。これ、このような汗だ』

頼朝が、烏帽子を脱ぐと、政子は受けとって、冠台にそれを載せた。そして鈴を鳴らし、清水をたたえた角盥をとりよせ、みずから、白布を絞って、良人の後ろへまわった。

良人の顔の汗ばみを、その白布で子どものようにふいてやろうとするのであった。部屋すみには、まだ小女房が角盥と一しょに控えていたので、頼朝はすこして顔だった。自分でふこうとするらしく手を伸ばした。けれど政子は、

『……お髪も』

といいながら、かまわず、頼朝の顔から額ぎわまでふいてしまった。櫛笥から櫛をとって、良人の髪の毛を、きれいに梳いた。愉しむごとく梳くのである。

小女房の眼は、素知らぬごとく、灰色の空に咲き腐えている白木蓮の方を見ていた。おかしくもない顔つきを一生懸命に守っているふうであった。こんなにも仲のよい主君の御夫妻が、どうかすると大喧嘩をしたり、頼朝が跣足のまま石ノ坪へ逃げ下りたりするような例を、しばしば見せられているからであらう。

『お退がり……』

と、政子が、白布を返すと、小女房は唯々として、蒔絵の角盥をささげて去った。

『おはだ着も、おかえなさいませんか』

『いや、面倒だ、かえなくてもよい』

『でも、お風邪を召すと』

『大事な、大事な』

すこし、うるさげな容子。かぶりを振りながら、頼朝は何か考えこんだ。

こんなときの良人の横顔には、ふと、かの女もあらためて見ほれてしまう。

蛭ヶ島の配所のころを思い出すのであった。そして今は完全にわがものとした男と見て、女の一生を、この君に賭けて勝ったことよろこびを、そっと、ひとり胸に謳っているかのような眸だった。

『何をお案じ顔に。……どうかなされましたか』

『どうもせぬ』

『お表にて囚人の中将どのへ、御見をお与えになったことで、なんぞお気にすまぬことでも』

『じつのところ、きょうの賜謁は、余り後味がよくないのだ。事前に、北条（時政）がしきりに献策するゆえ、かれのすすめのままに、中将ともあのような応対をしたが、満座、大名どものおる中で、どうやら、頼朝の方が、ちと、負目を負ったような』

『そんなことはございますまい。父の時政として、もとより遠い考えがあつておすめしたことでしょうし、御幕下の面々も、殿のお扱いを、情あるなされ方、慈悲のおことばとこそ聞け、負目を取ったなどとは、殿おひとりの思い過ごしにすぎませぬ』

『そうであらうか』

『そうですと』と、かの女はその才弁にすこし弾みをかけて——『殿はいま、武門第一のお方。重衡の中将どののは、以前はどうであらうとも、敵府の虜囚ではございませぬか。たれが、鎌倉どのと、とらわれの中将どのとを、対等に見ましようぞ。勝

目の負目のと、対等にお思いあそばす殿の方が、よほど、おかしゅうございます。つまらぬお煩いです。ホホホ』

と、あでやかに笑った。

春雷でもありそうな鬱陶しい真昼の深殿に、それはかの女からは立てえない驕慢な笑いであった。

頼朝も三十九である。

だが、十も下の政子は、かれ以上に、柳営のみだいに所として、一個の主婦としても、才女らしい成長ぶりを、内外に示していた。

かの女は、どう見ても、旧社会の世間並の女性ではない。

かの、平家の御台盤所、清盛の妻時子が、良人の死までは、育児の中の母か、内助の妻という殻を出ぬ平凡な女性型であったのとくらべると、鎌倉殿夫人は、ここの土壌、ここの建築、ここの幕府制度、一切のものが新しいように、新しい型の夫人だった。

もつとも、かの女が大胆に、その囚われない天性を振る舞う蔭には、父の北条時政という者が、つねに隠然と、どこかにいるという恃みも、無意識に働いていたにちがいない。

恋人の父親だし、また地方の有力者でもあり、旗挙げの味方を持つには、絶好な人物と、頼朝も初めは重宝者とわれから眼をつけて利用した男であった。が、いつのまにかこの必要物は、必要以上な存在にのし上がってきた。何かにつけ、政子に頭が上がらないというのも、親の時政がうしろにいるからであるように、いまいまいしく感じられるばあいが、頼朝には、ときどきある。

——といって、今となつては、その勢力を抜くこともできな

かった。家庭的にもできないし、創府五年の組織からも、到底、それはむずかしい。なぜならば、幕府創建の当初すでに、その梁や土台に組み入れられてしまったものだ。しいて除けば、一挙に、鎌倉の府の崩壊はまぬがれえまい。

内治のためには、ある程度の忍耐もやむをえず、と頼朝はしていた。かれの辛抱づきは、配所二十年の間にも試されたことである。そして頼朝自身はそれを、辛抱とも我慢とも思っていない。大事を成す君主には欠くべからざる包容力であると感じていた。

『これに、おくつろぎでおさったか。——時政でおざる。はいっても、お邪げになるまいかの』
どこかで、時政の声がした。

夫妻だけと思つてか、広縁の遠くに、たたずんでいるらしい。

けれど、召次も通さずに、ここへはいつて来るのは、かれぐらしいなもだった。

『北条か。なんの仔細、はいるがいい』

頼朝のことばに、時政は次の間へ姿を見せた。

そしてなお、頼朝の「近う」というゆるしを待つてから夫妻の前へ近づいた。舅面をして、君臣の礼をくずすような男でもない。

『表の大名どもは』

『殿がお立ちのあと、やがて皆、退出いたしました。きょうはまた、由井ヶ浜で諸家の騎射競べがござりますゆえ、多くはそれへ参ったよう』

『そうか。騎射の励みもよいが、これからはまた、船造り所も拡げ、諸家の兵に、船手の訓練を盛んにするよう仕向けねばならぬまいな。東国の者どもは、馬は天性のじょうずだが、海上の

ことには、うとい。兵船にかけては、平家よりはるかおくれる』

『さすが御着眼でございますな。……それについては、下向の梶原より、さっそく、進言がございましたが』

『船のことですか』

『さればで。いずれ、お召し出しのうちに、じきじき、何か申しあげること存じます……。きょうは、久びさで屋敷へ退がると申して、ただ、この御献上品を、てまえに託して、立ち帰りました』

時政は、たずさえていた懷紙笥ほどの物を夫妻のあいだに差し出した。その蓬萊時絵には、藤原時絵に特有な銀粉も用いてあり、見るから優雅な線と姿をもっている筈だった。

『これは、何か』

『梶原の京土産。つまり戦利品じゃと申して、みだい所のおなぐさみに、さしあげたい由でございます』

『いやいや、中は何かと訊ねるのだ、なかはよ？』

『香木でございます』

『香木』

『東国では手に入れ難い、伽羅、白檀、そして香木ではございませぬが、わけて貴重な麝香などもはいつておるとか申しました』

と、聞くと、政子はもうすぐ手にとってみたそうな、好奇に燃える眼をみはつて、

『ま……。そのような香料が、こんなにも』

と、父と娘のような甘えかたをみせかけた。

献上の品よりは、政子のその容子の方が、頼朝の気もちをふと害したのかもしれない。

頼朝は、興もない色を、わざとたたえ、

『公卿や平家にとっては、これらの品も、貴重であったかもしれぬが、鎌倉の婦女子には、さして必要な物ではない。まして、男どもには』

といつて、

『梶原は、どこで、かような物を、手に入れたのか。よもや、公卿の家から掠め奪った物ではあるまいの』

と、きびしきを見せた。

『いや、さようなことではありませぬ。福原の焼跡に、平家が残したつた石倉にあった物の由で、しかも、梶原自身が取り出したわけではなく、九郎の殿が、都へ持ち帰ったおびただしい分捕品のうちより、分け前として、九郎の殿から贈られた物なれど、武者に用なき品ゆえ、みだい所へ、献上申したいと、そのように、梶原は申しおりました』

『九郎が福原でかき集めた分捕品とな』

『はい』

『そのうちの一品か、これは』

『……と、梶原のことばではございますが』

『……………』

頼朝は黙った。

あきらかに、不快そうである。

弟の九郎義経にたいしては、自分が鎌倉を出ず、遠くにいるため、つねに関心をもっているらしい。怒じ義弟という者だけに、果して、自分の代官として、わがままをやっていないか、威をかりて、やり過ぎをしていないか、驕らないで、慎み深くいるかなど、ほかの諸将以上に、気もつかい、かれ自身が思いすぎにもなりやすいのであった。

時政には、その心の揺れが、すぐわかる。

大勢の眷族を抱え、内輪のもめや、世の急変にあたって、さ

んざん苦労してきたかれの眼から見れば、頼朝と義経の間柄など、児戯の類いといつていいほどな問題にすぎないが、頼朝にはまだ、一門の族長としての経験が浅い。そしてまた、人いちばい、猜疑ぶかい性格がある。——時政は、そこを、見落していなかった。

『いや何、合戦に打ち勝てば、一国も奪り、負くれば、万戸の富も捨て去るのが慣いでおざる。かような物も戦場では、瓦礫の遺物同様に見え申そう。何も、さして、お心を煩わすほどなことはない。はははは』

かれは、無造作に、そういった。

わざと、頼朝の弱点をついておきながら、またわざと、はぐらすように、政子へむかつて、おなじ風だったのであった。

『なんというても、化粧の料は、女子には魅力。武者によい物の具は見よいように、女性にも匂やかなお姿は欲しいものじゃ。みだい所、せつかく、梶原が京土産、ま、そちらへ、お収め置かれい、お収めおかれい』

千手ノ前

時政は、午すぎまで、柳営にいた。

夫妻と昼食も一しよにした。

その間に、いろいろな密談も出たが、とりわけ、重大なことは、重衡の中將の処置であつた。

——斬罪を急がないこと。